

農業青年たちと管理栄養士の卵たちの次世代コラボ “伝えたいのは、農業の「業」の厳しさだけでなく、奥深い「農」の世界”

JAえびの市青年部が教育ファームを行なうのは、子どもたちと、それから食の専門家を目指す学生たち。農業への理解を深めてもらうことで消費者と生産者を結んでくれるような食のプロになってもらいたいという、農業青年たちの思いが込められた活動だ。「農業は大変」だけでなく、農業の喜びや「食」の楽しさを経験できる取組みになるよう工夫をこらして、学生側も主体的に取組みの企画に参加。その結果、農家と同じまなざしで農業や地域を見る学生が少しずつ増えてきた。

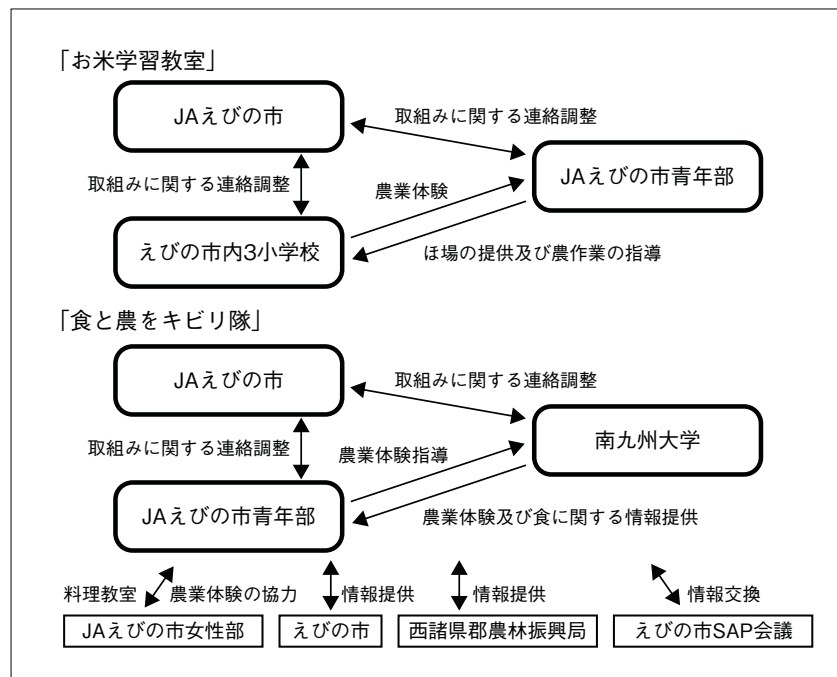
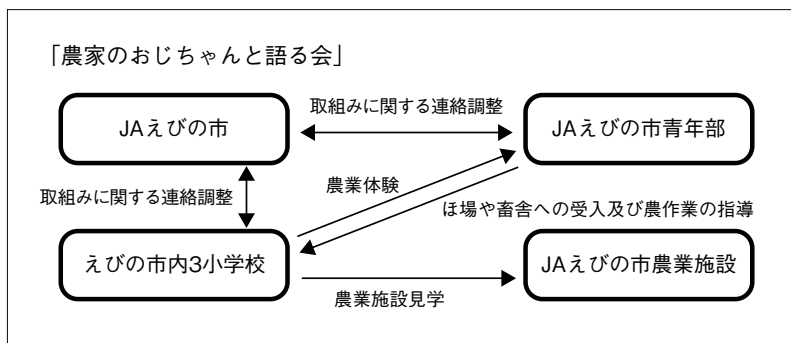
JAえびの市青年部

取組主体

- 名称：JAえびの市青年部
部長 鬼川 直也
- 担当窓口：JAえびの市
担当課(者)：担い手支援課(JAえびの市青年部事務局 竹中康晃)
住 所：宮崎県えびの市大字大明司1061-1
電話：0984-33-5758 FAX：0984-33-5752
E-mail：ja-youth@ebino.mz-ja.or.jp
- 団体等の属性：農林漁業に関する団体
- 構成員数：62人
- 連携団体及び協力団体
属性：農林漁業者、農林漁業に関する団体、市町村、学校(小学校、大学)
内訳：JAえびの市、南九州大学、JAえびの市女性部、えびの市、西諸県郡農林振興局、えびの市SAP会議



コンバインでの田植え体験



取組地域及び地域の特徴

取組地域：宮崎県えびの市

地域の特徴：

えびの市は人口2万2000人ほどの町。和牛生産および肥育を中心とした畜産部門が、えびの市の農林業生産額の76%を占めている。農耕地は、標高220mから720mの差がある盆地特有の地理を活用し、平場では普通作のお米、山手では高冷地野菜も生産している。

取組内容

(1)目的(目標)

未来を担う子どもたちや、将来管理栄養士や栄養教諭を目指す学生とJA青年部のメンバーが農業体験や食について意見を交わすことで、お互いに「食」や「農」に対する理解や知識を深め、取組みを通して参加者に日本農業の大切さを発信するスポークスマンになってもらうとともに、青年部自身が農業者としての誇りを持つことを目的とする。

(2)取組開始時期・経緯

1996年から「農家のおじちゃんと語る会」開始（現在、市内3小学校の5年生を対象に、農家での農業体験とJAの精米工場や集荷場等の施設を見学するバスツアー）。

2000年から「お米学習教室」開始（市内3小学校の5年生を対象に、田植えからイネ刈り、収穫祭までの農業体験会）。

2009年から「食と農をキビリ隊*」開始（南九州大学の管理栄養士や栄養教諭を目指す学生に、農業体験を通じて農業へ理解を深めてもらうことにより、その農業体験を生かして将来の食育活動のなかで消費者と生産者を結ぶ役割を果たしてもらうことを目的に結成）。

*きびる：「むすぶ」の意の方言



食の専門家を目指す学生たち

(3)対象作物

米、野菜

作物名・種類：

選定理由：つくりやすい、料理のメニューが多い。補助事業年度にスケジュールが合う。

(4) 具体的な取組内容

○「農家のおじちゃんと語る会」

えびの市内の3小学校（飯野、加久藤、真幸）の5年生を対象に、各種農家とJA施設をバスで巡回し、各種農作業体験や施設見学を行なう。

○「お米学習教室」

JA青年部メンバーの水田を活用し、青年部の指導のもと、えびの市内の3小学校（飯野、加久藤、真幸）の5年生を対象に、田植えからイネ刈り、羽釜での炊飯、料理教室や餅つきといった一貫した取組みを行なっている。

○「食と農をキビリ隊」

南九州大学の管理栄養士や栄養教諭を目指す学生が5～6名ずつのグループに分かれて農作業を行なう。

1グループにJAえびの市青年部から2名以上が指導員として付き添い、作業の手順や作業方法を指導。

平成21年度はサツマイモの植え付け、除草・つる返し、収穫を体験した。収穫したサツマイモと特産のえびの米を使った「サツマイモ、米粉を使ったスイーツコンテスト」を開催した。さらに活動の様子を加えたレシピ集を作成し、成果発表会を行なった。

22年度は、青年部の指導により農業の多面的機能や米づくりの基礎を研修し、田植え、除草作業、稲刈り、収穫祭を行った。収穫前には「案山子コンテスト」を行ない、収穫祭時は、羽釜での炊飯体験やオリジナル鍋料理を行なった。

(5) 年間スケジュール

○「農家のおじちゃんと語る会」

5月末に実施（平成22年度は口蹄疫の影響で9月末に実施）。

○「お米学習教室」

田植え6月末。生き物調査や除草7月～8月。稲刈り10月末。収穫祭11月。

○「食と農をキビリ隊」

田植え6月末。除草、田車押し7月。稲刈り10月末。収穫祭12月中旬。

(6) 参加者数・属性の実績及び推移

○「農家のおじちゃんと語る会」、「お米学習教室」

開始当初は1校で行ない、2年後からえびの市内の3小学校5年生を対象として継続。平成21年度は153名（飯野小68名、加久藤小40名、真幸小45名）が参加。

○「食と農をキビリ隊」

南九州大学健康栄養学部管理栄養学科の学生

平成21年度 48名（サツマイモ植え付け、収穫）他

平成22年度 45名（田植え、除草）他

(7) 経費

学校給食地場農畜産物利用拡大事業、およびJAバンク協調型事業のJA教育活動助成事業でほぼ全額助成。

平成21年度食農教育活動経費 2,373,169円

平成22年度食農教育活動経費 1,576,000円

なお、体験料として600円は個人負担。



青年部の意識も高まる

課題及び対処方法(ポイント・工夫)等

●関係者(団体)との連携の経緯

宮崎農政事務所が主催する食育のイベントにおいてJAえびの市青年部員と南九州大学の教員が知り合い、食農教育の推進には食の専門家を目指す学生と農業の専門家であるJAえびの市青年部がそれぞれの分野を理解することが大切であるという認識で一致し、農業体験や食の交流を行なうことにより、お互いの分野の理解や知識を深め食育の輪を広げていくことを目的に、JAえびの市青年部より働きかけ、教員の指導により、学生が主体となり、JAえびの市青年部と「食と農をキビリ隊」を結成した。

●連携を進めるに当たっての課題と対処方法(ポイント・工夫)

〔取組みにおける工夫点〕

- 農作業等の実施前に、これまでの農作業の段取りの説明および農業のもつ役割や多面的機能についての座学を行ない、体験する農作業の意義や農業の大切さを理解してもらうようにしている。
- 農作業を行なう際は、参加者を5～6人のグループに分け、各グループにJA青年部から2名以上がインストラクターとして指導を行なうことで、作業の疑問や方法に対して分かりやすく説明するとともに、安全管理を行なっている。
- 田植えの場合は、ほ場(17アール)の3分の2については手植えで実施し、残り3分の1は機械植えを行なうことで、現在の農作業の方法についても理解してもらうようにしている。
- 取組みにおいては、農作業だけでなく昼食も食農教育の一つとしてとらえ、地元食材にこだわったものを提供している。また、収穫物を活用した料理コンテストや成果発表会などさまざまな取組みを取り入れることで、農業の喜びや「食」の楽しさを体験できるよう工夫している。また、学生側も主体的に取組みの企画に参加している。
- 取組みにおいては、当事者の努力だけでなく、地域の協力も重要であることから、新聞やJAの広報誌などを活用して、取組み情報を地域へ積極的に発信し、地域のサポートや協力を受けやすい態勢づくりを心がけている(駐車場やトイレの使用について協力を受けている)。

〔連携の工夫点〕

連携した取組みの継続性が担保されるよう、取組み終了後に青年部と学校の間で次年度の取組み概要について、打ち合わせを行なっている。学校については、次年度のカリキュラムが当年度内に決められることか

ら、次年度の取組み時間の確保に向けて当年度内に取組み概要の打ち合わせを行なうことが重要である(大学生は、休日を利用した自主的な参加)。

連携に当たっては、関係者のお互いの目的を理解し、取組みのメリットをそれぞれ最大限に生かせるように、随時、話し合いをしながら取り組んでいる。

〔取組みの課題と対処〕

取組みを通して、生産者としてうまく説明や講義を行なうことの難しさを感じており、今後とも意識を持って、JA青年部員同士で研修等を行ない自己研鑽していくことが必要と考えている。

●安全管理

事前にJAえびの市青年部の指導に当たる担当者がほ場の下見を行ない、危険箇所や注意点を確認している。また、参加者は全員保険(JAの「旅行傷害共済」)に加入している。

トイレや手洗いについては、ほ場がある地域の公民館や直売所等を使用。新聞やJAの広報誌に取組みの報告を掲載しているため地域の方々の理解を得ている。

●取組みの広がり

南九州大学の食堂に本取組みへの関心を高めるため、また、食農教育への理解を深めるため、収穫した農産物を提供。21年度は収穫したサツマイモを使用したスイーツレシピを作成しスイーツコンテストを開催。22年度は案山子コンテストの開催。学祭での食農教育のPR活動。

これまでの成果

- 参加した学生から「スーパーで買い物する際に、えびの産の野菜が目に残るようになり購入するようになった」という報告があった。
- 学生が農業者と同じまなざしで農業や地域を見るようになった。
- 大学生がJAえびの市青年部に関わるイベント等への参加協力を行なってくれたり、宮崎県の農家やJAグループを代表して農水大臣へ署名の提出を行なってくれるなど、地域農業の応援団として活躍。
- JA青年部としては、消費者に農業の「業」の部分は伝えられても肝心の「農」の部分をうまく伝えられないという、取組みの課題が見つかったことが最大の成果であると総括している。

今後の構想、課題

構想：消費者と生産者が価値観を共有し、農業・農村を支える取組みができるような共通語(キーワード)を探していきたい。

課題：現状は全額助成を受けているが、これがなくなる恐れがある。補助が打ち切られても取組みを継続していくためには、取組み形態の見直しや経費負担が課題となる。食農教育の大切さを発信し、行政による支援が頂けるよう要望を行なうとともに、受益者負担についても更に検討する必要がある。

JAえびの市青年部

みんなのコメント集

取組の
実践者

JAえびの市青年部

「教育ファームには、伝える力と演出力が必要です」

「消費者が変わらなければ農業を取り巻く環境は変わらないが、農業の“業”の厳しさだけを伝えても同情だけでは得られない。作物を育てる楽しさ、収穫の喜びや感動を得られる場を通して、“農”が持っている多面的機能などについても伝え、日本農業の大切さを伝えていきたいです」

参加者

南九州大学生

「作物をつくるまでの大変さ、一つひとつの作業にさまざまな人たちが関わっていることのありがたさを感じました」

「今の宮崎の農業を守っていかなければいけないと強く思います。宮崎産の物を買うようにするなど、実生活で工夫していきたいです」

「食と農について考える機会が増え、食のプロを目指している私にとって大変貴重な体験になりました」

「農業は若者の間で敬遠されがちだと考えられていますが、今回の経験では多くの参加者がとてもいきいきと活動して、また、農家の方との関わり合いも築き上げることができたので、地域の活性化にもつながると思います」

「この宮崎という地域で、農業に関わり生産していくことはとても重要なことなので、このような場をもっと設けて、農業と地域の関わりについて理解を深めて根づかせていくことで、農家にとっても消費者や地域社会の人びとにとっても、暮らしやすい社会になるのではないかと思います」